

中間評価を受けた課題

1. 「県内のサルモネラの細菌学的および疫学的調査研究」 (2003～2005)

サルモネラによる散発下痢症の発生状況や原因血清型を確認し、さらに菌の各種性状（薬剤耐性型、プラスミドプロファイル、ファージ型や DNA）を検査し、食中毒由来株と比較することで株間の関連性や疫学的背景を検討し、食中毒発生防止のための基礎資料を得ることを目的にこの研究を行った。

県内の散発下痢症由来のサルモネラは、2003年に53株、2004年に51株が分離されたが、以前よりも減少していた。（図）血清型では、両年とも *S.Enteritidis*（SE）が最多で、2003年20株（37.1%）、2004年16株（31.4%）であったが、SEの占める割合は1996年～2000年が約80%であり、その率は激減していた。（図）他の血清型が多かったのは、*S.Typhimurium*13株、*S.Saintpaul*9株、*S.Infantis*7株であった。月別では、両年とも6～9月に多く、8月が最多であった。年齢分布では9歳以下の小児に多く、43名（41.3%）で以前の年と同様な傾向であった。

両年に分離された104株の薬剤感受性試験（17薬剤）の結果、38株がいずれかの薬剤に耐性を示した。耐性型は、SM（ストレプトマイシン）1剤耐性が11株、ついでNA（ナリジクス酸）1剤耐性が10株であった。最多血清型であるSE36株は、ファージ型（PT）、耐性型、プラスミドプロファイルの組合せで16の型に細分化され、1番多い組合せであるPT4・感受性・60kbプラスミド単独保有でも7株であり、特定の組合せの株の流行はみられなかった。

2003年～2004年には県内でのサルモネラ食中毒の発生はなく、食中毒由来株と散発下痢症株との比較ができなかった。散発下痢症は食中毒患者と異なり、原因食品の推定が困難であるので、2003年以前の食中毒株との比較も必要であり、最終年の2005年には実施する予定である。

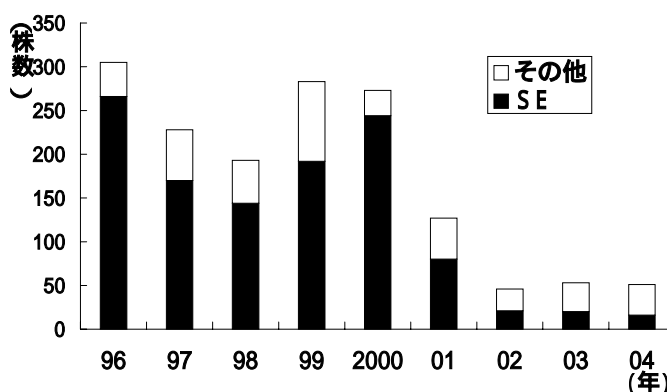


図 年次別散発下痢症由来サルモネラ分離状況（1996～2004年）

2. 「山梨県における地方病（日本住血吸虫病）関連資料の収集と対策事業の医史的検討」

本県特有の疾病である地方病（日本住血吸虫病）対策の歴史を後世に伝えるため、関連資料の収集をおこなった。また、本病対策推進の経過と対策技術の変遷、流行終息に至った過程等を検討し、病原体の発見（1904）以降約一世紀にわたる先人たちの苦闘の歴史を検証した。

なお、収集資料は県立博物館に一括保存されることが決定した。

1. 収集資料（5,300点）を基に、本病対策の経過、有病市町村における対応、明治から平成に至る検査結果等の関連資料を整理し、平成15年「地方病とのたたかい ―地方病流行終息へのあゆみ―」（山梨地方病撲滅協力会、194P.）を出版した。
2. 県立博物館の展示テーマ「共生する社会」の一部として「地方病」が常設展示されるため、関連写真、機材、資料等を提供し、意見交換を行った。
3. 資料収集作業を通じて、新たな資料も発掘されているが、分散する資料の探索は未だ不十分である。全体的考察のためにはさらに多岐にわたる収集と内容の検討が必要と考えられる。



表紙



写真資料のページ



復刻資料のページ